

2022年度 個人研究実績・成果報告書

2023年 6月 2日

所属	商経学部	職名	教授	氏名	小田 徳仁
研究課題	企業会計および財務報告における複式簿記の役割と和式簿記との接点				
研究キーワード	企業会計 財務報告 複式簿記 阿蘭陀	当年度計画に対する達成度	4.当初の計画どおり研究が進まなかった		
関連するSDGs項目	4. 質の高い教育をみんなに	16. 平和と公正をすべての人に	該当なし	該当なし	
<p>1. 研究成果の概要</p> <p>今から800年ほど前にイタリアのベネチアやジェノバなどの海洋都市で発祥した「複式簿記」が、現在の日本の企業会計および財務報告にどのような影響を与えてきたのかを時系列的に研究している。その結果、「複式簿記」が存在しなければ、現在の資本主義経済社会がそもそも誕生し得なかったこと、また複式簿記が存在しなければ企業会計にも発展し得なかったことが確認できた。当然、財務報告は企業会計（特に財務会計）から派生した分野であるので、財務報告も存在不可能なことも確認することができた。また研究の過程で複式簿記が日本に伝播したといわれている明治6年より以前に豪商と呼ばれる商人の店（たな）の金銭等の記帳方法である「和式簿記」の仕組みが極めて複式簿記に似ていることが判明した。現時点では、和式簿記は日本で発祥した日本固有の簿記であるというのが日本簿記学会での公式見解となっている。しかし和式簿記には、キリスト教に由来する複式簿記固有の思想が組み込まれており、「日本で発祥した」という見解に大きく疑問が生じることになった。そこで本当に和式簿記は日本固有の簿記であるのか、それとも複式簿記の原理原則をコピーし派生した改良型簿記であるのかについて調査研究を行っていくことにした。現時点では、日本には1600年代には長崎の出島にある阿蘭陀の商館に「複式簿記」の書物が持ち込まれている事実が当時の商館長の日記によって判明した。今後、キリスト教徒・阿蘭陀商人・複式簿記をキーワードとして、当時の阿蘭陀通詞の活動記録の古文書を発掘し阿蘭陀商人から日本の豪商にどのように伝授されたかを解き明かすことを目的としている。</p> <p>本研究の遂行のために必要な先行研究論文の調査研究は継続しているが、先行研究のほとんどが「和式簿記は日本で発祥した」という日本簿記学会での公式見解に基づいており、「和式簿記はキリスト教に由来する複式簿記から派生した簿記である」という私自身の仮説とは相異なっている。しかし、この仮説を証明するためには、新たな資料（古文書）の発見が必要不可欠であり、この新たな資料（古文書）が存在する可能性のある場所が長崎商人が活躍した長崎県（出島周辺）と、中井家等の豪商（江州商人・近江商人）が活躍した滋賀県である。ただこれらの場所への現地調査は、2020年から続く新型コロナウイルスに伴うコロナ禍による活動自粛と、私自身、基礎疾患がある者のため、残念ながらこの3年間実施できていない。よって、当年度計画に対する達成度については、本研究のコアである現地調査が未実行であることを考慮して「当初の計画どおり研究が進まなかった」と判断している。この現地調査については、社会的な状況と体調を判断して実施したいと考えている。なお、本研究においては、阿蘭陀語による会計用語の習得と、豪商の会計帳簿の古文字の解読には相当の時間を要すると予想している。</p> <p>また、現地調査を伴わないもう一つの研究分野である「国際会計」および「財務報告」に関する最新の研究は実施できている。</p>					
2. 著書・論文・学会発表等（査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載）					

【論文（査読あり）】

【著書・論文（査読なし）】

レクチャー初級簿記第2版，千葉商科大学会計研究室編，中央経済社，2023年4月1日

- 担当箇所： 第1章 簿記の基礎と役割
第2章 株式会社と複式簿記
第3章 資産・負債・資本（純資産）と貸借対照表
第4章 収益・費用と損益計算書
第5章 簿記一巡の手続，取引と勘定
第6章 仕訳と転記，主要簿への記入

【学会発表等】

3. 主な経費

- ① 資料収集および収集資料のデータ処理のため，PC一式を購入した。
- ② 関連する書籍を購入した。

4. その他の特筆すべき事項（表彰，研究資金の受入状況等）

（本文は2ページ以内にまとめること）

CUC PORTALの「研究業績」の情報を更新されましたら，チェックを入れてください。☑